

セメント町の「俳句茶屋」

風情ある看板との出会い

セメント町には、いまだに昭和の風情を残している風景が数多くあります。

ある夏の昼下がりに、セメント町の通りを散策していると、通り沿いに古き良き時代の雰囲気を感じ出す木造建築が目に入りました。横長の総二階で、一階部分にはかつての店舗の看板が何枚か掛かっています。その一つには「俳句茶屋」の文字が。現在は閉店している様子ですが、「セメント町」と「俳句茶屋」という意外な組み合わせに、自然と興味をそそられます。



通りに面した「俳句茶屋」の看板。その隣には「大三元」という看板も。

俳句茶屋の謎

「俳句茶屋」というお店がいつ、どんな思いで始められたのか、いろいろな方に聞いてみましたが、「飲み屋だったんじゃないか」「10年くらい前までお店をやっておられたような気がする」とか、いくつかの情報は得たものの、詳細は不明のまま。「俳句茶屋」という看板を出すからには、それなりの思いがあったと思うのですが…。現在、テレビで俳句番組が人気となり、市内でも俳句教室が新たに開かれるなど、ちょっとした俳句ブームの中で気になる看板です。ご存知の方はいらっしゃいませんか？

お遍路さんに愛された俳句茶屋

俳句茶屋について調べてみると、四国八十八箇所霊場の第七十一番所、彌谷寺（香川県三豊市）の参道に、100年以上続いた有名な「俳句茶屋」がありました。お遍路さん達が詠んだ一万句を超える短冊が、天井からぶら下がる光景はまさに壮観。香川県の俳人、合田了字路が「山の蝶飛んで短し茶屋のれん」と詠んだ名所も、今年（2018年）惜しまれながらそののれんを下ろしました。

労働者と俳句

「労働者」と「俳句」で想起されるものに、昭和を代表する俳人、野見山朱鳥が編者となった炭鉱俳句集「燃ゆる石」（昭和40年4月発刊）があります。

朱鳥によれば、炭鉱俳句とは、「炭鉱の生活と風物、及び周辺の山河等を詠んだ俳句」のことで、この作品集には、朱鳥の句「麦秋の硬山王の墓のごと」をはじめ、全国の炭鉱俳人から募った一万五千句以上から選ばれた三千四百句が収録されています。



セメント町の「俳句茶屋」では、俳人達が工場や町で働く労働者達の生活を詠んだのでしょうか、はたまた日々の労働を終えた人々自身が山陽小野田の風物を謳ったのでしょうか。夏の昼下がりに偶然見つけたスポットに、想像は膨らむばかり。もし俳句茶屋のことをご存知のことがいらっしゃれば、ご一報いただければ幸いです。

（文・写真：山田幸司）